

上越・平標山西ゼン

— 仙ノ倉谷西ゼン～平標新道 —
(2009年8月の記録)

安齋恭一

日 程：2009年8月22日(土)夜～8月23日(日)

メンバー：山田英夫、安齋恭一

タイム：

林道ゲート駐車場5:30 — 林道終点5:45 — 西ゼン出合6:40 — 東ゼン出合7:40～8:10 — 第一スラブ入口9:10 — 第二スラブ入口9:45 — 第二スラブ出口10:20 — 水場10:40～11:10 — 登山道12:00～12:30 — 林道ゲート駐車場15:30

天候不順で取りやめた計画だったが、不意に誘われふたつ返事。しかし、本来滑はあまり好きではないのだが。22日(金)に関越に乗り、23日(土)1,000円になるよう時間調整して湯沢ICを降り、土樽で仮眠をとる。

8月23日(日)曇り

しらみ始めた頃林道に向かう。ゲート手前は少し広がっていて10台位のスペースがある。先客が3台、テントが1張りあった。

身支度をしてゲートを越え林道の終点までは僅かな道のりであった。仕事の車が5台位駐車していた。ここから5メートル位の吊り橋を対岸に渡ると河原から山道に入る。踏み跡は明瞭である。さしたる上り下りもなく西ゼンの出合に到着する。道の右側に背丈ほどのケルン(遭難碑)があるので間違ふことはない。テント一張り分位の広場もある。



西ゼン出合

ここで沢支度をして朝食をとる。沢の上部は見渡せない。登山靴の一行が沢を登ってゆく、いったい何処に行くというのだろうか。ここから西ゼン出合手前までは、単純な河原歩きとなる。やがてごろごろしていた岩が尽きて滑らかな河床が現れると、眼前には滝が現れ正面には尾根が張り出して、出合が近いこと、稜線がガスっていることが分かる。最初の滝だったか、傾斜もスケールもないけれど滑って足踏み状態になってしまった。だから滑は好きではないのだ。お助け縄にすがって一段上のスタンスに立つ。

出合の滝は写真でお馴染みの滑滝で、中央に下弦の月状に浅い溝が右に上がっているのをこれを利用して左岸に渡り、乾いたところを辿りながら登る。幾つか滝を越えながら滑を登ってゆくとスラブ帯となる。第二スラブに達したかと思えたが、早すぎる。ここからが第一スラブ。先程からの滑の登りの続きの様ではあるが兩岸が開けていて気持ちがよい反面、不用意に歩けば滑るので緊張しながら登る。出口は狭まっていて、数個の滝を快適に越えると幅の広い2段15メートルの滝が現れる。左右

どちらも登れるが、右を登った方がその先でちょっと楽と思う。第二スラブは傾斜がやや急になる。出口の滝が遠望でき、ここからどうやってあの滝を越えるのか不安になるが、ホールドや草を注意深く拾ってゆけば何とか登ってゆける。中程の中央の溝にはハーケンが2カ所に打ってあった。滝は左から回り込むが、容易であった。一番狭まった付近にも1本のハーケンがある。この先ちょっと面白い小滝を数個越えると垂直のすだれ滝となり、左から巻くと源頭となる。狭まった沢をしばらく行くと笹藪に突き当たり、祠の中から清水が湧き出している地点に着く。沢は突き当たりだが、踏み跡は祠の左右に付いている。どちらに行っても稜線に突き上げるが、左をとれば相当なアルバイトが待っているだろう。ここで大休止して、背丈を超える藪に突入。当然右に。ガイドでは30分だが結構消耗する。最後のひと登りも急で苦しいが、お約束通り平標新道の池塘に出られる。ここは広く平らで快適な場所、沢装備を解いて登山靴に履き替えすっきりした気分を下る。上半分は低い笹道で眺望がよく気持ちが良い道だが、油断をすると転倒し、笹の斜面を滑ることになるのでちょっと慎重に、下半分は急な樹林帯で膝が笑う。出合までは約2時間、下るに従い夏が戻ってきた。



第二スラブ

仙ノ倉谷西ゼン廻行図

「ふうじいの時々アウトドア」から引用

